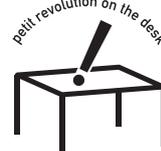


Vol.62

机の上のピさな変革

図式化の効能

こんにちは、菅俊一です。今回は、「図式化する」ということについて考えてみたいと思います。この手法はさまざまな場面で用いられていますが、ここでは抽象的な概念を可視化するという観点で行なってみましょう。

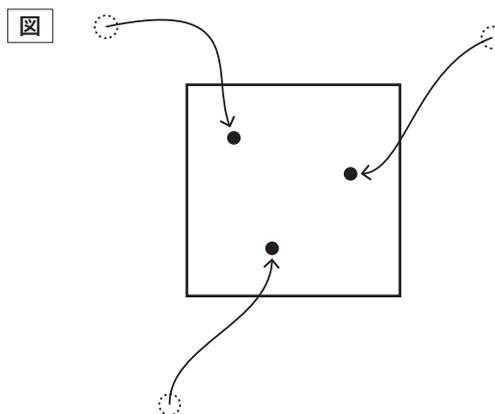
では早速、「外部から隔離して保護されている」という状態を、点と線（矢印）などの単純な要素だけで描いてみてください。その際、具体的なモチーフなどは描かないように注意しましょう。あくまでも抽象的なお題を抽象的なイメージのまま、構造や特徴を図式化することに取り組んでみていただきたいです。

いかがですか？ 初めてだと結構難しいかもしれません。例として、私が描いた図を右上に載せておきます。

今回は「外部から隔離」という言葉があったので、あるオブジェクトが空間の中に閉じ込められている様子を描いてみました。おそらくみなさんも、見た目は違うとは思いますが、同じような要素や構造の図を描いたのではないのでしょうか。

それでは、今度はいま描いた図から具体的なものを連想してみましょう。図の抽象度が高いため、いろいろなものが連想できるのではないかと思います。

たとえば、エレベーターのような箱もその1つです。構造としては外界から隔離することで、高速に上下移動を可能にしているものであると言えます。また、ゴミ袋を連想することもできるかもしれません。生活空間から



隔離することで、臭いや汚れを部屋から取り除いたり、不要なものを分別する作用があるからです。

図式化によって具体性が増す

抽象的な概念を図式化することによって、概念（文章）だけではなかなか連想できなかった具体例を想像することができます。今回の例では、図を描いてみることで、「隔離して保護」という言葉が「箱のような空間の中に入れる」というように、わずかに具体的になりました。

このように言葉のままではなく、図を描いてみることで抽象度がコントロールされた状態になると、さまざまな連想が生まれやすくなるのです。▲

PROFILE 菅俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。